道元禅師と『大智度論』

―『正法眼蔵』における三昧について―

永井賢隆

問題の所在

道元禅師が受容した経論の中で特に注目されてきたのは、『法華経』と天台教学の各典籍であろう。特に禅師の著述において、『止観輔行伝弘決』（以下『輔行』）の引用は論書として最も多い。従って、著者荊渓湛然の見解が禅師に与えた影響は計り知れないと思われる。その『輔行』の次に引用が多い論書は『大智度論』（以下、『大論』）であることが知られる。

周知の通り『大論』は般若空の思想を基本的な立場とし、諸法実相を積極的に肯定する一書である。また、六波羅蜜や大乗の菩薩思想など、宗教的実践の解明に努めている書でもあり、種々の学説や用例、仏教史的伝説から実践規定に至るまで解説しており、「仏教百科事典」と評される論書である。当書は『中論』と並んで龍樹の代表作として位置付けられるもので、印度・中国・日本の仏教に与えた為、龍樹は「八宗の祖師」と仰がれるのである。

しかしながら、『大論』は道元禅師との関係に於いて、特に取り立てて問題とされてきていない。しかし先に述べたように禅師の『大論』からの引用は、既に指摘されているものだけでも十六例におよぶ。[1] また、第一次の出典として『大論』が規定されていなくとも、『輔行』や他の論書を介した孫引きも数例認められる。それら『輔行』などからの孫引きを含めると十九例となる。その引用の多くが、十二巻本『正法眼蔵』に見られる事は一つの特徴とも言えるであろう。

本稿ではまず始めに禅師における『大論』の依用実態を明らかにし、続いて『正法眼蔵』を中心に、『大智度論』と「三昧」について論考したい。

著述における『大智度論』の依用実態

次の表は『正法眼蔵』をはじめとした道元禅師の著述における『大論』の引用を示したものである。[2]

著述	事項	大智度論	止観輔行伝弘決『大正』四六巻	その他出典	成立年代	備考①	備考②
七十五巻本『正法眼蔵』							
「行持下」巻	無量恒河沙の身命	巻九八「陀波崙品」		『摩訶止観』巻一上	一二四二年書		
「伝衣」巻	無量恒河沙の身命	巻九八「陀波崙品」		『摩訶止観』巻一上	一二四四年二月二四日示衆		
「三十七品菩提分法」巻	仏法大海	巻一「如是我聞一時釈論」			一二四四年二月十五日示衆・書写		先師古仏云
「三昧王三昧」巻	若結跏趺坐	巻七「放光釈論」					
同	以是故結跏趺坐	巻七「放光釈論」					
「出家」巻	醉婆羅門	巻一三「戒相義」	※巻二・二一二頁		一二四六年示衆	大論十三曰	
十二巻本『正法眼蔵』							
「出家功徳」巻	出家功徳	巻七「讃尸羅波羅蜜義」			一二五五年書写	龍樹菩薩言	
同	醉婆羅門	巻一三「戒相義」	※巻二・二一二頁				
「袈裟功徳」巻	出家功徳	巻七「讃尸羅波羅蜜義」			一二四〇年示衆、一二五五年書写	龍樹祖師曰	
「発菩提心」巻	たとひ生ずれども	巻三五「第二報鉢品」		『涅槃経』聖行品	一二四四年二月一四日示衆		
同	魔有四種	巻六八「釈顧視品」					
「供養諸仏」巻	三阿僧祇香供養	巻四「菩薩釋論」		『倶舎論』巻一八	一二五五年書写		
同	瓦師なり	巻三「住王舎城釈論」					
同	捻香小因大果	巻七「放光釈論」	※巻四・二五二頁			龍樹祖師曰	
同	諸仏恭敬法	巻一〇「十方諸菩薩来釈論の余」				龍樹祖師曰	先師の室にして夜話を聞く。

「帰依仏法僧宝」巻	牛戒鹿戒	巻二二「八念義」				
「深信因果」巻	破世間因果	巻一八「般若波羅蜜」		※『摩訶止観』巻三	一二五五年書写	龍樹祖師云
「三時業」巻	迦葉波仏	巻七「讃尸羅波羅蜜義」			一二五三年三月九日書写	
同	舎利弗・目犍連	巻一四「尸羅波羅蜜義」		『雑宝蔵経』巻三『雑阿含』巻四八『十誦律』巻三七		
同	四禅比丘臨命終	巻一七「禅波羅密」				
「四馬」巻	快馬見鞭影	巻一「縁起義釈論」		※『法華玄義』巻一	一二五五年書写	龍樹祖師曰
「四禅比丘」巻	四禅比丘	巻一七「禅波羅密」			一二五五年書写	龍樹祖師曰
同	舎利弗の智慧	巻一一「舎利弗因縁」				
同	大阿羅漢	巻五「摩訶薩埵釈論」				龍樹菩薩云
同	論力外道	巻一八「般若波羅蜜」		※巻十・四四〇頁		
同	長爪梵志	巻一「縁起義釈論」				
別輯						
「仏道」巻	第三生に得道	巻一三「戒相義」				
『永平広録』二	先世作瓦師	巻三「住王舎城釈論」		『法華玄義釈籤』巻十五	一二四四年七月～一二四六年六月	
『永平広録』四	諸法因縁生	巻一一「舎利弗因縁」			一二四六年六月以降	
『永平広録』五	仏坐入禅定	巻二一「八念義」			一二四六年六月以降	
『永平広録』六	小阿蘭若	巻一五「毘梨耶波羅蜜義」			一二四六年六月以降	先師天童云
同	毒箭喩	巻一五「羼提波羅蜜法忍義」				
『永平広録』七	坐禅人皆住深山	巻一七「禅波羅密」			一二四六年六月以降	龍樹祖師云
同	坐禅則諸仏之法	巻一七「禅波羅密」				龍樹祖師曰 師云、龍樹祖師既恁麼道。

同	羅睺羅阿修羅王	巻一〇「十方諸菩薩来釈論の余」				
『知事清規』	仏法大海	巻一「如是我聞一時釈論」		一二四六年六月一五日撰述		
同	捻香小因大果	巻七「仏土願釈論」	※巻四・二五二頁		龍樹祖師曰	
『宝慶記』	離五欲離五蓋	巻一七「禅波羅密」	巻四・二六二頁	『摩訶止観』巻四		
同	羅漢支仏之坐禅	巻一七「禅波羅密」				
同	空拳誑小児	巻一九「三十七品義」				
同	深山幽谷	巻一七「禅波羅密」				
同	初心得道	巻七五「灯喩品」	※巻一・一七八頁	『摩訶止観』巻一		

ここで示したように、その著述・説示中に『大論』は四十二例依用されている。[3] その内、二十例が十二巻本『正法眼蔵』であり、引用も長文であることが指摘できる。[4] また『宝慶記』における引用は、その全てが如浄の言葉であり、道元禅師自身が取捨し、述べたものではないことも一言しておかねばなるまい。

示衆や撰述時期が不明なものも多いが、『大論』が依用された著述は、『宝慶記』、「行持下」巻、「袈裟功徳」巻を除けば、寛元二年（一二四四年）以降に多く見られる。異例として挙げた『宝慶記』は、入宋中のもので有るならば当然の事であろう。「行持下」巻も単語の引用にとどまっており、『摩訶止観』に同様の語があることからすれば、第一出典を『大論』と措定することは出来ないだろう。また「袈裟功徳」巻の示衆は仁治元年（一二四〇年）であるが、懐奘によって書写されたのは禅師示寂三年の後である。示寂までの十三年間に推敲・校訂された可能性は高いだろう。[5]「供養諸仏」巻では、如浄の夜話にて『大論』を典拠とする説話を聞いたが、「のちには智論の文にむかうてこれを撿挍[6]」したと伝える。この「のちには」がいつの時期か明らかでは無いが、引用実態からすると入宋中や帰朝直後ではなく、晩年の事であったのではないだろうか。[7]

ところで禅師における龍樹の評価についていえば、十二巻本『正法眼蔵』「発菩提心」巻に、

これひとり龍樹祖師菩薩の所説といふとも、帰命したてまつるべし。いかにいはんや大師釈迦牟尼仏の説を、龍樹祖師、正伝、挙揚しましますところなり。（春秋社版『道元禅師全集』二巻、三五八頁、以下、『全集』。）

とあるように、単に伝灯歴代祖師の一人ということではなく、

釈尊の法を一人挙揚し、解き明かした一大祖師として評価されている。[8] また、「仏性」巻では、

かなしむべし、大宋一国の在家・出家、いづれの一箇も龍樹のことばをきかず、しらず、提婆の道を通せず、みざること。（『全集』一巻、三一頁）

と、釈尊の法を一人挙揚し、解き明かした一大祖師として自らが評価している龍樹も、宋国においては軽視されていることを嘆き、龍樹を理解しない者の具体例として、育王山の知客とのやり取りを挙げ批判している。

また「備考②」に記したように、『大論』の引用の前後に、如浄の語が引用されている事例が数例見受けられる。数としてはそれほど多くはないが、このような龍樹の評価は、『宝慶記』における如浄の説示が密接に関わっているであろう。特に身心脱落に関係する「離五欲離五蓋」と、「羅漢支仏之坐禅」に『大論』が用いられていることは重要であろう。[9] また如浄は『宝慶記』の「三障」に対する「拝問」に対し「如龍樹等祖師之説、須保任也。不可有異途之説」と述べている。この一文を踏まえると、禅師の龍樹への評価の高さは、如浄の影響も想定できるであろう。

如浄からの影響を考慮すると、仁治三年（一二四二年）に、『如浄語録』がもたらされた事[10]も、引用時期が寛元二年以降に集中している事の一因となるのではないだろうか。『如浄語録』到来を機[11]に、ある種の内面的変化が見られるという指摘があり、[12] その変化の影響の一つである可能性も否定できない。また鏡島氏が、『如浄語録』を通して見た如浄像は、『宝慶記』を通して見た如浄像と異なり、宋朝禅者としての面が押し出されてくる、[13] と指摘しているように、『如浄語録』の伝える如浄像が、道元禅師が否定する宋朝禅者であったということも考慮すべきであろう。推論ではあるが、『大論』と如浄が共に記されるということは、先に述べた龍樹への評価と如浄を結びつける導線になり得るのではないだろうか。

『大智度論』における三昧と『正法眼蔵』「三昧王三昧」巻について

「三昧」（samādhi）は、一般には最広義の定を指し、定、定意、三摩地、等持、正受といった語に訳されている。周知の通り、定は「心を統一」する事であるから、その有り様として種々の様相をもつ。三昧の成立や展開、各種三昧に関しては、『仏教における三昧思想』（日本仏教学会編、一九七六年刊、平楽寺書店）に詳しい。

『大論』では大きく分けて二種の三昧が説かれる。

有二種三昧。一者、仏三昧。二者、菩薩三昧。

〈二種の三昧有り。一つには、仏の三昧。二つには菩薩

の三昧なり。〉（『大正』二五、一二八頁中、「初品中十方菩薩来釈論」）

このように、仏の三昧と菩薩の三昧を明確に区別している。[14] この二種の三昧は、「般舟三昧」（念仏三昧）と「三昧王三昧」[15]であろう。「般舟三昧」については、武田浩学氏『大智度論の研究』[16]に詳しい。それによると、『大論』は、般舟三昧を重要視していることが、指摘されている。[17] また、この『大論』における般舟三昧の重視は、『般舟三昧経』の影響があるが、『般舟三昧経』が阿弥陀仏一仏に強く光を当てるものであるのに対し、『大智度論』では特定の一仏に限定されない「諸仏」に対するものであると指摘されている。[18] 般舟三昧について『大論』では次のように説く。

菩薩位者、無生法忍是。得此法忍、観一切世間空、心無所著、住諸法実相中、不復染世間。復次、般舟般三昧、是菩薩位。得是般舟般三昧、悉見現在十方諸仏、従諸仏聞法、断諸疑網。是時菩薩心不動揺、是名菩薩位。

〈菩薩位とは、無生法忍是れなり。此の法忍を得れば、一切世間の空を観じ、心に著する所無く、諸法実相の中に住し、復た世間に染まらず。復た次に、般舟般三昧、是れ菩薩位なり。是の般舟般三昧を得れば、悉く現在十方の諸仏に見え、諸仏の法を聞くに従って、諸の疑網を断ず。是の時に菩薩の心動揺せず、是れを菩薩位と名づく。〉（『大正』二五、二六二頁上、「初品大慈大悲義」）

このように般舟三昧は、菩薩の三昧である。また次のようにもある。[19]

般若波羅蜜、阿鞞跋致品中、仏自説阿鞞跋致相。如是相是退転、如是相是不退転。（中略）復次、得三法。一者、若一心作願欲成仏道、如金剛不可動不可破。二者、於一切衆生、悲心徹骨入髄。三者、得般舟三昧、能見現在諸仏。是時名阿鞞跋致。

〈般若波羅蜜の阿鞞跋致品中に、仏は自ら阿鞞跋致相を説く。如是の相は是れ退転なり。如是の相は是れ不退転なり。（中略）復た次に、三法を得べし。一には、若し一心に願を作し仏道を成ぜんと欲せば、金剛の如く動かすべからず、破するべからざるが如し。二つには、一切衆生に於いて、悲心骨に徹し髄に入る。三には、般舟三昧を得て、能く現在の諸仏を見る。是の時、阿鞞跋致と名づく。〉（『大正』二五巻、八六頁上、「初品中菩薩釈論」）

このように、退転の可能性のある菩薩から、不退転の菩薩である「阿鞞跋致」菩薩への条件として、般舟三昧による「見仏」が規定されている。[20] 般舟三昧は念仏三昧と称されるように、仏を求める行である。[21] 即ち般舟三昧の目的は「見仏」にあると言えよう。

次に「三昧王三昧」についてである。三昧王三昧は三昧中の王であり、[22]また「此の如きの三昧は唯だ仏のみ能く知りたまえり」（『大正』二五巻、一一一頁下）と仏の三昧としてのみ説かれるのである。また次の様に説かれる。

爾時、世尊自敷師子座、結跏趺坐、直身繫念在前、入三昧王三昧。一切三昧悉入其中。

〈爾の時、世尊は自ら師子座を敷き、結跏趺坐して、直身して、繫念前に在り、三昧王三昧に入る。一切の三昧は悉く其の中に入る。〉（『大正』二五、一一一頁上）

と、あるように、一切の三昧を内包する三昧の王である。そして次のようにある。

問曰、多有坐法、仏何以故唯用結跏趺坐。答曰、諸坐法中結跏趺坐最安穏、不疲極、此是坐禅人坐法。攝持手足、心亦不散。又於一切四種身儀中、最安穏。此是禅坐取道法坐。魔王見之、其心憂怖。如是坐者、出家人法。在林樹下結跏趺坐、衆人見之皆大歓喜、知此道人必当取道。

〈問うて曰く、多くの坐法あるに、仏は何を以ての故に唯だ結跏趺坐を用うるや。答えて曰く、諸の坐法中に結跏趺坐最も安穏なり、疲極せず、此は是れ坐禅の人の坐法なり。手足を攝持せば、心も亦た散ぜず。又た一切四種身儀中に於いて、最も安穏なり。此れは是れ禅坐は道を取る法の坐なり、魔王之を見て、其の心憂怖す。是の如きの坐は、出家人の法なり。林樹の下に在りて結跏趺坐せば、衆人は之を見て皆な大いに歓喜し、此道人の必ず当に道を取るを知る。〉（『大正』二五、一一一頁中）

結跏趺坐が身心共に最も安穏であり、「此是禅坐取道法坐」とあるように、仏道をあきらめる坐禅であると説くのである。

周知の如く、この「三昧王三昧」を中心に説かれるのが、『正法眼蔵』「三昧王三昧」巻である。[23]同巻は、如浄の「身心脱落」の説示と、『大論』の「三昧」についての引用のみで構成されているといってもよい巻である。まず有名な如浄の説示である「参禅者、身心脱落也、祇管打坐始得、不要焼香・礼拝・念仏・修懺・看経」を引用し、

打坐の仏法なること、仏法は打坐なることをあきらめたる、まれなり。たとひ打坐を仏法と体解すといふとも、打坐を打坐としれる、いまだあらず。いはんや仏法を仏法と保任するあらんや。（『全集』二巻、一七八頁）

このように坐禅が仏法そのものであることを述べる。そして『大論』巻七「放光釈論」にある偈[24]を依用する。

釈迦牟尼仏、告大衆言、若結跏趺坐、身心証三昧、威徳衆恭敬、如日照世界。除睡懶覆心、身軽不疲懈、覚悟亦軽便、安坐如龍蟠。見画跏趺坐、魔王亦驚怖、何況証道人、安坐不傾動。

〈釈迦牟尼仏、大衆に告げて言く、結跏趺坐するが若きは、身心に三昧を証し、威徳、衆の恭敬すること、日の世界を照らすが如し。睡懶を覆う心を除き、身軽くして疲懈せず、覚悟して亦た軽便、安坐して龍の蟠が如し。跏趺坐を画くを見るに、魔王も亦た驚怖す、何に況んや証道の人の、安坐して傾動せざるをや。〉（『全集』二巻、一七八頁）

傍線を記した一文は、『大論』では、「身安入三昧」とあり、『正法眼蔵』では「心」の字が添加されている。先に如浄の「身心脱落」が引かれてからの一文であるから、これは後人によるものでは無く、禅師が意図的に添加したものであろう。それでは、この添加が原意から離れるものであろうか。『大論』十六巻「毘梨耶波羅蜜義」では次のようにある。

如仏所説、爾時、菩薩精進、不見身、不見心、身無所作、心無所念、身心一等而無分別。所求仏道以度衆生、不見衆生為此岸、仏道為彼岸。一切身心所作放捨、如夢所為、覚無所作。是名寂滅諸精進故、名為波羅蜜。

〈仏の所説の如くんば、爾の時、菩薩は精進して、身を見ず、心を見ず、身に所作なく、心に所念なく、身心は一等にして分別なし。求むる所の仏道を以て衆生を度するに、衆生を此岸と為し、仏道を彼岸と為すことを見ず。一切の身心の所作を放捨すること、夢に為す所は覚めて所作無きが如し。是を寂滅と名づけ、諸の精進の故に、波羅蜜と名づく。〉（『大正』二五、一八〇頁上）

このように身心は一等にして、分別されて捉えられていないのである。冒頭にも述べたように、『大論』は空思想を基本的立場に持つのであるから、当然のこととも言えるであろう。また先に述べたように引用された文は、元来は偈である。それを禅師は偈の体裁を崩すことによって、「心」を添加する事を可能としているのである。そして道元禅師はこの一段を拈じて、「よのつねに打坐する、福徳無量なり」と、原意と自らの坐禅をより明解にしていると言えるであろう。続いて次のように引用する。[25]

釈迦牟尼仏、告大衆言、以是故結跏趺坐。復次如来世尊、教諸弟子応如是坐。或外道輩、或常翹足求道、或常立求道、或荷足求道。如是狂狷、心没邪海、形不安穏。以是故、仏教弟子結跏趺坐直身坐。何以故、直身心易正故。其身直坐、則心不懶。端心正意、繫念在前。若心馳散、若身傾動、摂之令還。欲証三昧、欲入三昧、種種馳念、種種散乱、皆悉摂之。如此修習、証入三昧王三昧。

〈釈迦牟尼仏、大衆に告げて言く、是を以ての故に、結跏趺坐す。復た次に如来世尊、諸の弟子に応に是の如く坐すべしと教う。或いは外道の輩、或いは常に翹足し道を求め、或いは常に立ちて道を求め、或いは足を荷て道

を求む。是の如きは狂狷、心は邪海に没し、形は安穏ならず。是を以ての故に、仏、弟子に結跏趺坐直身の坐を教う。何を以ての故に、直身は心正し易きが故なり。其の身直く坐せば、則ち心懶うからず。端心正意にして、繫念、前に在り。若しくは心馳散し、若しくは身傾動せば、之を摂して還らしむ。三昧を証せんと欲し、三昧に入らんと欲せば、種種の馳念、種種の散乱、皆悉く之に摂す。此の如く修習すれば、三昧王三昧に証入す。〉

（『全集』二巻、一七九頁）

先の偈の直後の一段からの引用であり、『大論』当該部と比較すると、ほぼ全同であることが分かる。繁を厭わず『大論』を次に揚げる。

以是故、結跏趺坐。復次、仏教弟子応如是坐。有外道輩、或常翹足求道、或常立、或荷足。如是狂狷、心没邪海、形不安穏。以是故、仏教弟子結加趺直身坐。何以故。直身心易正故。其身直坐則心不嬾。端心正意、繫念在前。若心馳散、攝之令還。欲入三昧故、種種馳念皆亦攝之。如此繫念、入三昧王三昧。（『大正』二五巻、一一一頁中）

『大論』での「以是故」は、先の引用文を指し示すが、先に見たように禅師は原意の読み替えを行っていないのであるから、『正法眼蔵』でも原意そのままに先の文を指す。

『正法眼蔵』の傍線部に示した箇所は、全て禅師による添加である。[26] まず「若身傾動」と「種種散乱」は対応しており、「心」の「みだれ」を言うのであれば、「身」の「みだれ」も同様に、といったところであろう。『大論』の説示は、「直身」の結跏趺坐による「心易正」という効用を説いているのであるから、改めて「身」について言及する事はしないのであるが、禅師による「身」についての添加は、三昧王三昧を「空三昧」という原意[27]に、近づける意図があるのではないだろうか。

また「欲証三昧」であるが、「入」と「証」共にさとると言う意味にとれるのであるが、「入」は境地に入るであり、「証」は明らかにするといったところであろうか。「三昧王三昧に証入す」としているように、真理をさとって仏の境地に入る、と、三昧王三昧が仏の境涯であることの強調ともとれる。

ところで『大論』では三昧王三昧に「入」るとのみ説かれており、「証」するとは説かれない。仏がこの三昧王三昧に入ることを『大論』では次のように説く。

①仏欲説摩訶般若波羅蜜、入三昧王三昧。

〈仏は摩訶般若波羅蜜を説かんと欲し、三昧王三昧に入る。〉（『大正』二五、一一二頁下）

②復次、仏在王舎城耆闍崛山中、説是般若波羅蜜時、仏

四部衆及諸外道、在家、出家、諸天龍、鬼神等、種種大衆集会。仏入三昧王三昧、放大光明、遍照恒河沙等世界、地六種震動。説是般若波羅蜜六波羅蜜、乃至三無漏根。〈復次に、仏、王舎城の耆闍崛山中に在りて、是の般若波羅蜜を説く時、仏の四部衆及び諸の外道、在家、出家、諸の天龍、鬼神等、種種の大衆集会す。仏三昧王三昧に入りて、大光明を放ち、遍く恒河沙等の世界を照らし、地は六種に震動す。是の般若波羅蜜、六波羅蜜、乃至三無漏根を説く。〉（『大正』二五、一三六頁中、「初品十力釈論」）

③問曰、仏一切智無所不知。何以故入此三昧王三昧、然後能知。答曰、欲明智慧従因縁生故、止外道六師輩言、我等智慧一切時常有常知故。以是故言仏入三昧王三昧故知、不入則不知。

〈問うて曰く。仏は一切智にして知らざる所無し。何を以ての故に此の三昧王三昧に入りて、然して後に能く知るや。答えて曰く。智慧は因縁に従り生ずる事を明らかにせんと欲するが故なり。外道の六師の輩が、我等が智慧は一切時に常に有り常に知る、と言うを止めんが故なり。是れを以ての故に言く、仏は三昧王三昧に入るが故に知り、入らざれば則ち知らずと。〉（『大正』二五、一一一頁下）

このように、仏が三昧王三昧に入るのは、般若波羅蜜、即ち完全なる智慧を説くためであり、また智慧の空なることを説く為であるとしている。[28]「仏は三昧王三昧に入るが故に知り、入らざれば則ち知らず[29]」ということは、三昧王三昧に入ることの結果として般若波羅蜜が規定されるのである。つまり、般若波羅蜜を証する三昧が、『大論』に説かれる「三昧王三昧」であると言えよう。しかしながらこれは、『大論』に説かれる仏であるから般若波羅蜜を説くのであって、例えば『法華経』であれば、二乗作仏や仏の久遠実成なることを説くであろうし、『涅槃経』であれば、悉有仏性や涅槃の常楽我常などを説くであろう。即ち、所依の経典を設定しない状態で見るのであれば、三昧王三昧は仏の境涯である、という見解になるのではないだろうか。そのような見解の上で、先の証入の語が三昧王三昧が仏の境涯であることを強調する意味で添加されているという考察も成立するのではないだろうか。

話を戻すと、禅師はこの引用の後に、次のように述べる。

あきらかにしりぬ、結跏趺坐、これ三昧王三昧なり、これ証入なり。一切の三昧は、この王三昧の眷属なり。結跏趺坐は、直身なり、直心なり、直身心なり、直仏祖なり、直修証なり。直頂寧なり、直命脈なり。（『全集』二巻、一八〇頁）

このように結跏趺坐が、そのまま直ちに、「身、心、身心、仏祖、修証、頂寧、命脈」であると述べる。そして、「これすなはち黄巻朱軸なり」として一切の経典であるとし、「ほとけの、ほとけをみる、この時節なり。これ、衆生成仏の正当恁麼時なり」と述べる。仏の境涯である三昧王三昧＝結跏趺坐であるから、坐禅する正当任麼時がほとけであり、また万法（仏）に証せられるということであろう。

このような坐禅を諸行・諸経・諸三昧の根源と見る事は既に「弁道話」を始めとした著述に見ることが出来、この「三昧王三昧」巻は、その具体例として結跏趺坐を強調した事に特徴があると考えることが出来るが、果たして結跏趺坐を標榜する為だけに『大論』を用い、この巻を残したのであろうか。筆者は「三昧王三昧」巻の成立の背景に如浄の説示があるのではなかろうか考える、如浄が『宝慶記』において、『大論』の説を用い示した一段に以下のようなものがある。[30]

和尚或時示して曰く「羅漢と支仏の坐禅は、著味せずと雖も、大悲をかく。故に仏祖の大悲を先と為し、一切衆生を度さんと誓う坐禅には同じからざるなり。西天の外道もまた坐禅するなり。然りと雖も、外道には必ず三患有り。謂く著味、謂く驕慢なり。所以に、永く仏祖の坐禅と異なるなり。又た声聞の中にも亦た坐禅有り。然りと雖も声聞は、慈悲乃ち薄し。諸法中に於いて、利智を以て諸法実相を貫通せず。独り自身のみを善くし、断諸の仏種を断ず。所以に、永く仏祖の坐禅と異なるなり。謂ゆる仏祖の坐禅とは、初発心より、一切諸仏の法を集めんと願い、故に坐禅中に於いて、衆生を忘れず、衆生を捨てず、乃至昆虫にも、常に慈念を給い、誓って済度を願い、所有の功徳を一切に廻向するなり。是の故に仏祖は、常に欲界に在りて坐禅弁道す。欲界中に於いて、唯だ瞻部州を最たる因縁と為す。世世に諸の功徳を修し、心の柔軟を得るなり。」と。

道元拝して白さく「作麼生か是れ心の柔軟なるを得ん」と。

和尚示して「仏仏祖祖の身心脱落を弁肯するは、乃ち柔軟心なり。這箇を喚びて仏祖の心印となすなり。」と。

（原漢文）（『全集』七巻、三九頁）

このように如浄は坐禅における慈悲の強調をしたという。[31]そして、このような坐禅における利他行の強調は、中国禅宗の中で欠落しているという指摘もある。[32]

確かに鏡島氏が、十二巻本『正法眼蔵』を「救生篇」、七十五巻本『正法眼蔵』を「弘法編」と性格付け、名付けたように、[33]少なくとも「三昧王三昧」巻に直接的な慈悲の強調は為されていない。しかしながら、このような説示を踏まえると、この『大論』を用い坐禅（結跏趺坐）を標榜することは、

坐禅における慈悲の強調が、内包されていると言えるのではないだろうか。

むすびにかえて

以上、道元禅師における『大智度論』の依用を確認し、『大論』の「三昧」と、道元禅師の「三昧」との関係を「三昧王三昧」巻を中心に論じてきた。道元禅師が、自らの法門を、「仏作、仏行」であるという意識を持っていることは、周知の如くである。その意識を形成する上で、この『大論』の「三昧王三昧」が果たした役割は、極めて大きなものであると言えよう。その結果、この『大論』における坐禅の受容が、龍樹―如浄―道元禅師という思想的流れの展開を想わさせるのであり、従来問題とされてきた、道元禅が、中国禅の機械的受容か否か、という問題や、如浄から道元禅師への思想的受容がどれほどあったのか、という疑問を解決する一つの手がかりとなるのではないかと考えている。

当面『大論』が著述・説示中に四十二例依用されていることが確認できたが、これが全てではないであろう。直接の引用はともかくとして、依用に関しての検討は未だ十分とは言えないと思う。また「三昧」について、「海印三昧」巻や「自証三昧」巻等、他の三昧に関する考察、また中国禅、天台教学における四種三昧を含めた論考は紙数の関係もあって行えなかったが、これらについては今後の課題としたい。

註

（1）鏡島元隆氏『道元禅師における引用経典・語録の研究』二二四頁

（2）『大蔵経』の巻数は略し、※は『大論』以外が第一出典であると判明しているものに附した。備考②は、引用文前後に如浄に関する記述が有るものに附した。『宝慶記』は引用例全てが如浄の語のため特に指摘しない。

（3）細やかな単語に関しては、未だ多く存在するであろう。更なる精査の必要を感じる。

（4）石井清純氏「道元撰新草十二巻本『正法眼蔵』の性格について」（『松ヶ岡文庫研究年報』五、一九九一年、所収）では、十二巻本『正法眼蔵』における経論の多用について、「それは禅師が自身の思想、境涯を教学的に再度提示しようとしたものではないだろうか」という指摘がある。

（5）十二巻本『正法眼蔵』の成立年次は特定できないが、鏡島氏は、「十二巻本『正法眼蔵』について」（『道元思想体系』一一巻、思想篇五所収、三九頁）において、「十二巻本『正法眼蔵』は新草として道元禅師によって、「出家功徳」巻を起点として編述されたものである。その成立時は明確ではないが、「出家」巻が記

述された寛元四年（一二四六）を去ること程経たないころであろう」としている。

（6）春秋社版『道元禅師全集』二巻、三六〇頁。（以下、『全集』）

（7）十二巻本『正法眼蔵』は、経典・論書の長文引用から、建長二年（一二五〇）の波多野氏からの一切経の寄贈後に推敲・校訂された可能性も高いであろうが、恐らく『大智度論』は大蔵経寄贈前には手にしていたであろう。

（8）石井清純氏「『学道用心集』における龍樹の語の引用について」（『印度学仏教学研究』五七号、二〇〇八年、一〇八頁）

（9）如浄が『大論』を重要視していたことについては、拙稿「『宝慶記』における如浄禅師の『大智度論』の依用について」（『曹洞宗総合研究センター学術大会紀要』二〇一一年所収）参照。

（10）『永平広録』巻一「興聖寺語録」に天童和尚語録到上堂がある。

（11）柳田聖山氏（「道元と臨済」思想五三号）と伊藤洋一氏（「道元と如浄」弘前大学人文学部『人文論叢』第九巻三号～第十二巻九号）は、『如浄語録』到来を機に道元禅師の思想展開を見る。柳田氏は、『如浄語録』に対し禅師が怒りを覚えたとするのに対し、伊藤氏はそれが禅師にとって如浄との感動的な再会であったとする。

（12）石川力山氏「祖山本『如浄録』について」（道元思想体系九巻、三八八頁）

（13）鏡島氏『前掲書』一一五頁

（14）このように、『大論』では三昧を二種に分けているのであるが、「仏は是の三昧王三昧に入りて、一切の仏法の宝蔵を悉く開いて、悉く看る。この三昧王三昧の中に観了りて、自ら、我が此の法蔵は無量無敷にして、思議すべからず、と念ず。然して後、三昧より安庠として起ち、天眼を以て衆生を観、衆生の貧苦を知る。此の法蔵は因縁に従って得、一切衆生もまた得べし。但だ痴冥に坐して、求めず、索めざるのみ。」（『大正』二十五、一一二頁中）と、このように一切衆生も三昧王三昧に入り無量無敷の法蔵を得ることができるが、衆生は迷妄に坐し、一切法を求めないことにより、貧苦であると説くのである。だからといって仏の三昧である王三昧に入ることが出来ないとは説かない。

（15）『増壹阿含経』巻四一（『大正』二、七七三頁下）「知空三昧者、於諸三昧最為第一三昧、王三昧者、空三昧是也」とあり、また雑阿含経（『大正』二、五七頁中）には、「舎利弗白仏言「世尊。我今於林中入空三昧禅住。」仏告舎利弗「善哉、善哉。舎利弗、汝今入上座禅住而坐禅、若諸比丘欲入上座禅者、当如是学」とある。

（16）二〇〇五年、山喜房佛書林刊。同書では般舟三昧を中心に論考が為されているが、三昧王三昧に関する論考は見受けられない。

（17）武田氏『前掲書』、一七九頁

（18）武田氏『前掲書』、一八八頁

（19）『大正』二十五、『大論』四巻、「初品中菩薩釋論」、八六頁上

（20）武田氏『前掲書』、一八五頁「『般舟三昧経』を始め、諸書に見出すことが出来る。」

（21）『正法眼蔵』「見仏」巻における「見仏」は、『大論』における般舟三昧とは趣を異にするといえるであろう。『正法眼蔵』「見仏」巻では、『大論』は用いられてない事もあるが、例えば「おほよそ一切諸仏は、見釈迦牟尼仏、成釈迦牟尼仏するを、成道作仏といふなり。かくのごとくの仏儀、もとよりこの七種の行処の条条よりうるなり」（「見仏」巻、『全集』一巻、一〇二頁）と述べられているように、菩薩の階梯論に立脚する『大論』の般舟三昧による「見仏」とは趣を異にすると言えよう。また「是法華経者」と説かれているように、『正法眼蔵』「見仏」巻では、『法華経』の説示を中心的に引用し説かれている事には注意すべきであろう。

（22）「この三昧は諸々の三昧の中において、最も第一にして、自在に能く無量の諸法を縁ず。（中略）一切の天上天下にては仏第一なるが如く、この三昧もまたかくの如く、諸々の三昧の中において、最も第一なり」（『大正』二十五、一一一頁下、「初品放光釈論」、以下、『大論』における三昧王三昧については「初品放光釈論」によるので、これを略す）とある。

（23）他の三昧については本稿では触れないが、周知の通り『正法眼蔵』の表題に「三昧」の語を抱くものは三巻ある。則ち「海印三昧」巻、「三昧王三昧」巻、「自証三昧」巻である。また本文中に「三昧」の語を用い、その内容を説いているものとして、「弁道話」、「法性」の二巻がある。また本文中に散見される「三昧」の語としては、「無相三昧」（「仏性」巻）、「八万四千の三昧陀羅尼」（「伝衣」巻、「陀羅尼」巻）、「三昧華」（「空華」巻）、「無情三昧」（「遍参」巻）、「諸仏集三昧」（「発菩提心」巻）、「手裏蔵身三昧」（「優曇華」巻）等がある。また、天台教学に目を向けてみると、智顗が『摩訶止観』で説いた、四種三昧が有名である。類似する三昧として常坐三昧がある。これらとの詳細な比較は、別の機会を設けたいが、あくまで類似であり、同一のものでは無い。勿論、類似性や成立に到る経緯を鑑みれば、その影響の可能性は十分に考慮しなければならないであろう。また「三昧」の名が附されている巻において、天台教学の典籍が引用されている例は、「自証三昧」巻における「或従知識、或従経巻」の語のみである事を一言しておきたい。

（24）『大正』二五、一一一頁中。「若結加趺坐、身安入三昧。威德人敬仰、如日照天下。除睡嬾覆心、身軽不疲懈。覚悟亦軽便、安坐如龍蟠。見画跏趺坐、魔王亦愁怖、何況入道人、安坐不傾動。」

（25）『全集』二、一七九頁

（26）また「繋念」が「修習」に置換されている。「繋念」は、一所に思いを向け、他を思わないことである。これが「修習」に置

換されていると言う事は、「念」という「心」の所作のみではなく、「身心を挙しての修習」という意図であろう。

(27)『増壹阿含経』巻四一（『大正』二、七七三頁下）「知空三昧者、於諸三昧最為第一三昧、王三昧者、空三昧是也。」とある。また雑阿含経（五七頁中）には、「舎利弗白仏言「世尊。我今於林中入空三昧禅住。」仏告舎利弗「善哉、善哉。舎利弗、汝今入上座禅住而坐禅、若諸比丘欲入上座禅者、当如是学。」とある。

(28) また様々な方便の為に三昧王三昧に入るとしている。例えば、神力を見た人が人に非ずという疑いを断ずるためであったり（『大正』二五巻、一一二頁上）、諸天や辟支仏などが用いる三昧に入って、敬う心を損なわないために入るなどがある。（同上）

(29) これは三昧王三昧に入れば仏であり、入らなければ仏ではないとも言えるであろうが、「是の三昧王三昧に入るは、時に以て難しと為さず、念に応じて則ち得る」（『大正』二十五、一一一頁上）と、自在であることを述べている。

(30)『大論』における該当箇所は、『大正』二十五、一八八頁中。

(31) この内容は、『永平広録』巻六（『全集』四、二七頁）、巻七（『全集』四、九七頁）にも見ることが出来る。

(32) 石井修道氏『道元禅の成立史的研究』（一九九一年、大蔵出版、三〇頁）。石井氏は、この『大論』の説は、達摩の『二入四行論』の称法行や『六祖壇経』の四弘誓願とも異なるものであり、むしろ中国禅の大きな流れからは、忘れ去られたと指摘し、また『大論』一七巻の禅波羅密を大系化した天台智顗の『摩訶止観』や『天台小止観』においても、歓心の十法門中に「起慈悲心」があっても積極的な慈悲の主張とは言い難いと指摘している。

(33)「十二巻本『正法眼蔵』について」（『前掲書』、四一頁）